

メンブ

愛ちゃんのもの

# 神戸巡回日記

長征社

三度目の冬が来た

たけしま・さよ







# 舞ちゃんの神戸巡回日記

三度目の冬が来た

たけしま・およ

長征社

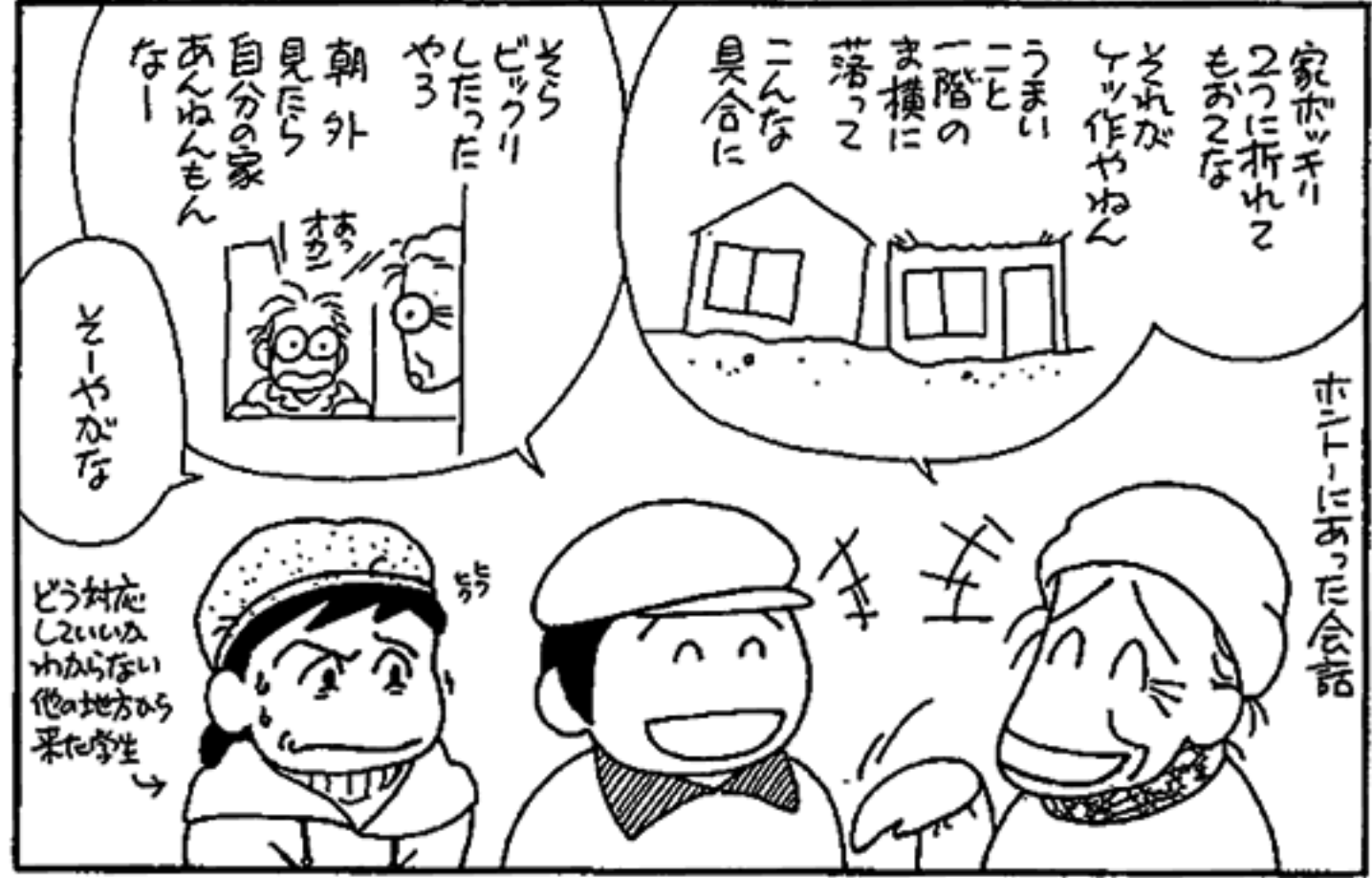
## 目次

これまでのあらすじ編	3
夏編	21
秋編	35
そして一年編	47
あるテント村の歴史	61
あとがき	78



私 立内愛子  
職業 フリーライター  
兵庫県生まれ

TVの前KALDI  
全っんいらいし  
耐えられず  
2月の半ばも  
過ぎた  
ボランティアとして  
神戸入りしたー



これまづの  
あらすじ  
'95冬〜初夏

編

『11月15日』『11月15日』『11月15日』『11月15日』『11月15日』『11月15日』『11月15日』『11月15日』『11月15日』『11月15日』



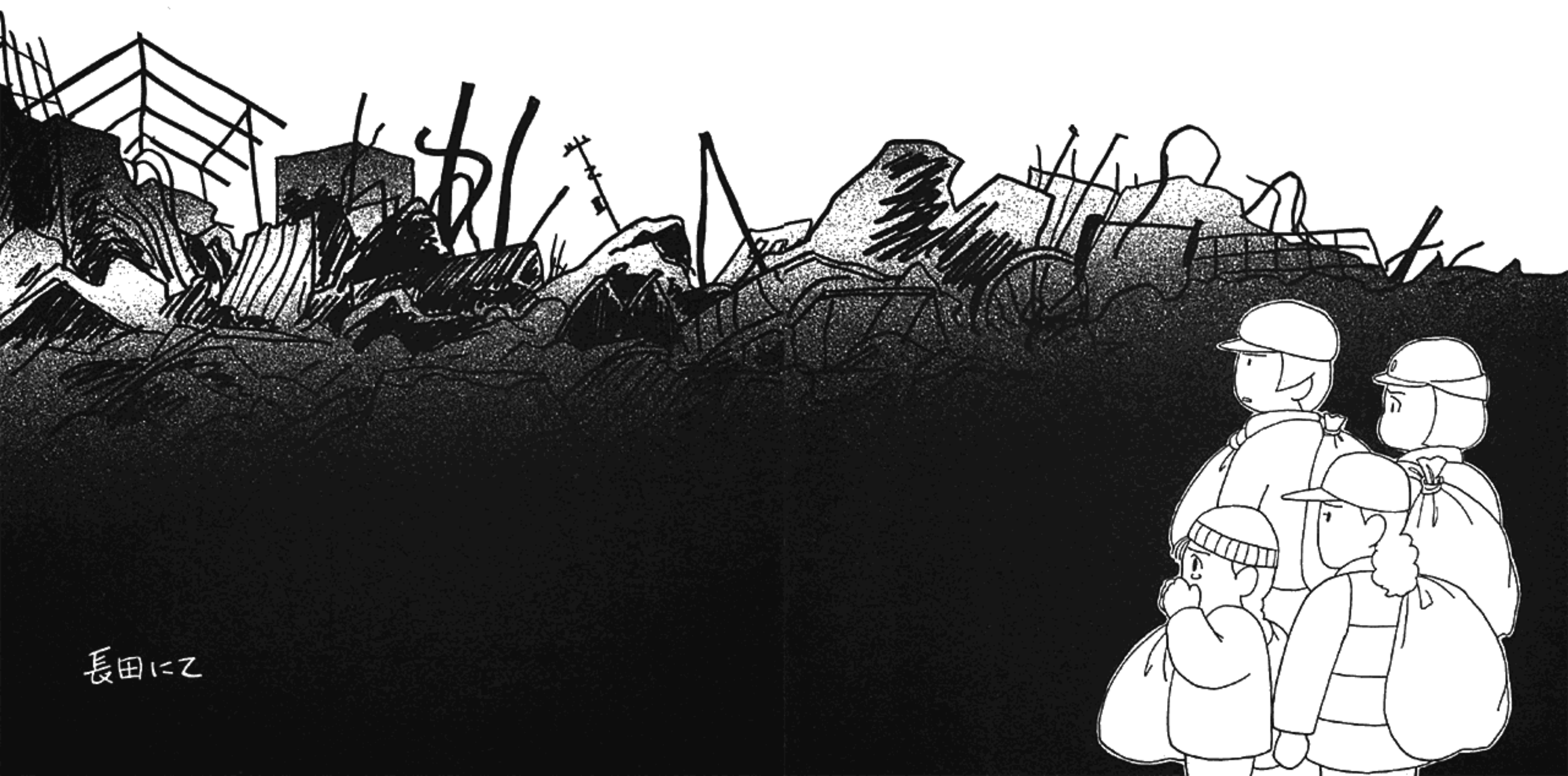
避難所への物資を  
振り分け荷物にして  
兵庫駅から西代までの道を  
黙々と歩いた

菅原通りまでの  
道はまるで  
爆撃の跡だった

この時代に  
この国に生まれ  
見るこのあろう  
はずのない  
景色だった

この広大な一角で  
家々が燃え  
多くの人々が  
家族の目の前で  
生きたがりに  
焼かれたのだ

肩にくいこむ  
荷の重さも忘れて  
私達はただ  
呆然と立ちつくした

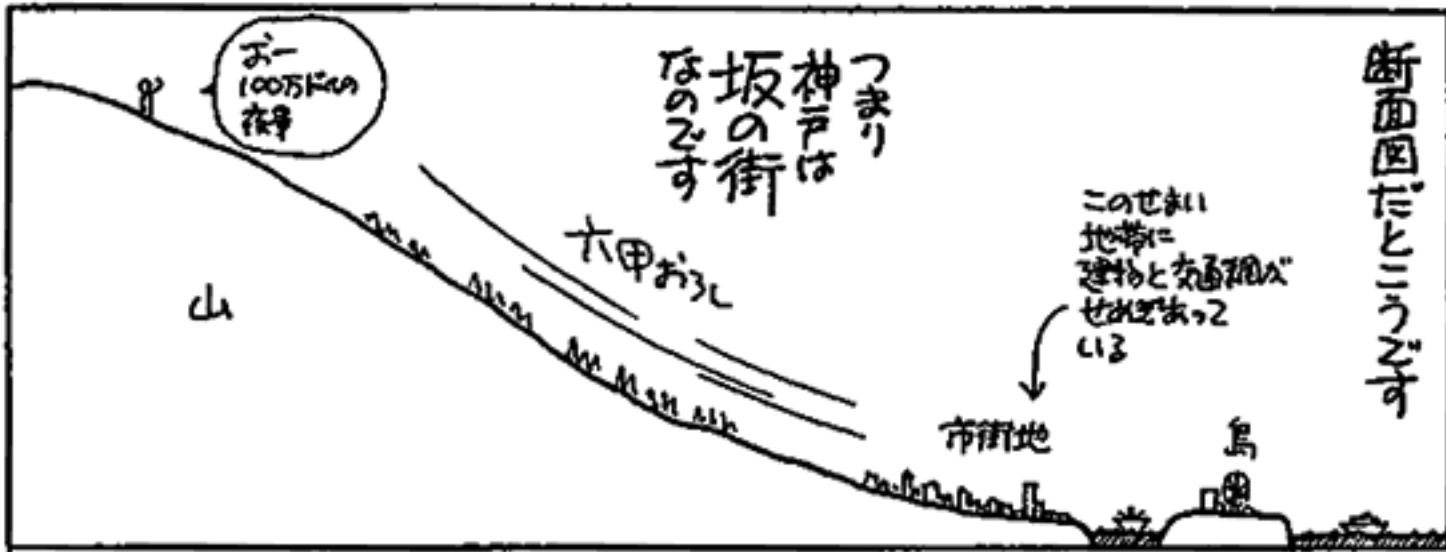


長田にて

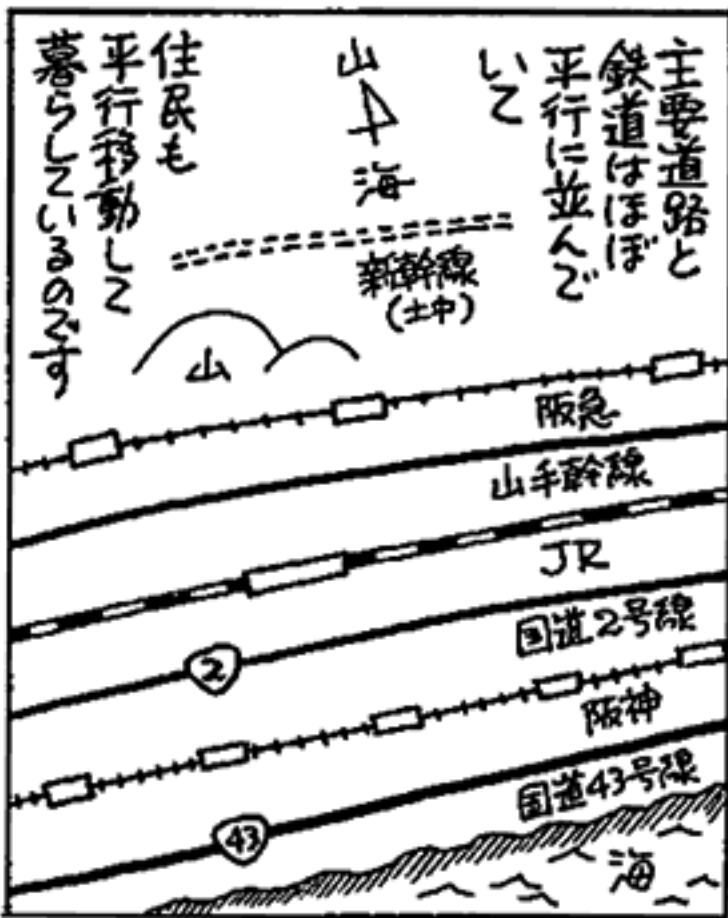




「説明しましよ」  
 なんと、神戸の地理三つこと  
 神戸の地理三つこと  
 乗らな  
 の？  
 と、この瞬間が、おさまった



震災の被害は下町に集中しました  
 古い住宅や、狭い住宅は、パツパツに  
 OX-1 地帯は、液状化現象もおさまった



兵庫出身の作者も、今度の三つこと、つくづく、阪神間の生活うらやま、等閑線に、ほほ比例する。  
 ...と、いつか、思い知りました  
 ちせみは、阪神沿線生まれ→

はるなほり故郷

ねーちゃん、生まれ淡路やて？  
 そっち行ったらなあ、なんぞ  
 ハア、そー、ですな

あ、おほちゃん、あたし、そっちも大変やう？  
 仮設も、すぐ建てた、みん米も、とるし  
 仮設も、すぐ建てた、みん米も、とるし

そらもう、神戸の方が、ずっと大変じゃ、そっちで、一生けんめい、したりよ  
 ...うん、わかった

どうしてみんな、こんな、やさしいんだらう  
 おじいちゃん、おほあちゃん、秋には、暮まのしに行かからな

海が見えた

仮設市場、おほみ、たぐま、しーね、にぎやか、やまご、おほ

あ、どしたの

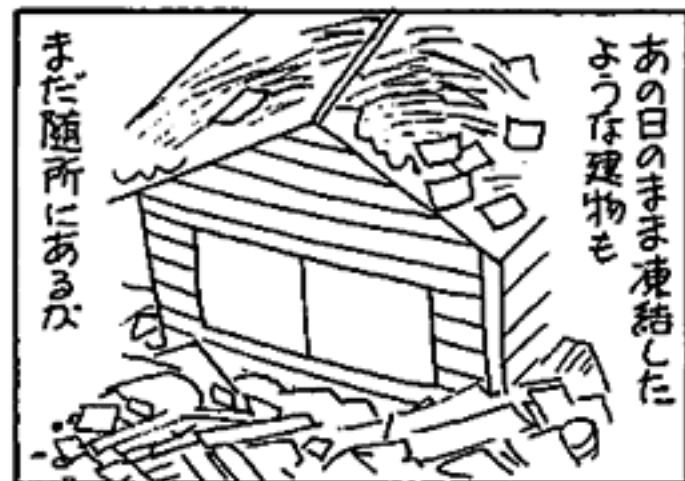


あたしの生まれ育った、瀬戸内海だ、こんな形で再会するなんて、思ってもみなかった





今日も失われ行く



新しい風景



テント・新局面編



テント・あいつら編



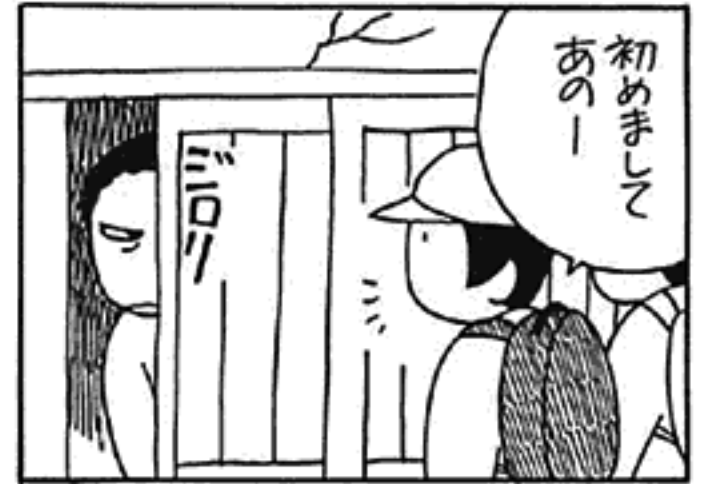


物資・バーディング編

自然との共生

そしてこんなことも

こんなこともある





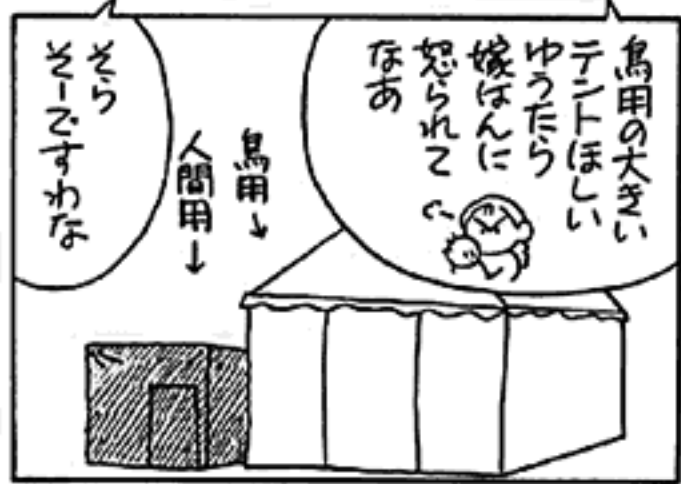
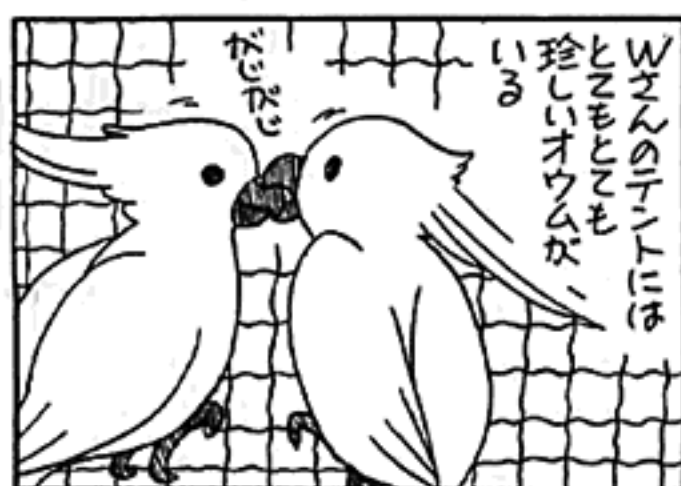
兵庫県人



自立とは何だ



被災地の動物達・II



被災地の動物達・I



※この漫画は被災地ではよく見られる風景を基に描かれています。



ある日の巡回で  
しばらく訪ねてなかった  
テント村に行ったら  
もうそこには  
何もなかった

木とベンチと  
すべり台があっただけの  
元のただの  
公園だった

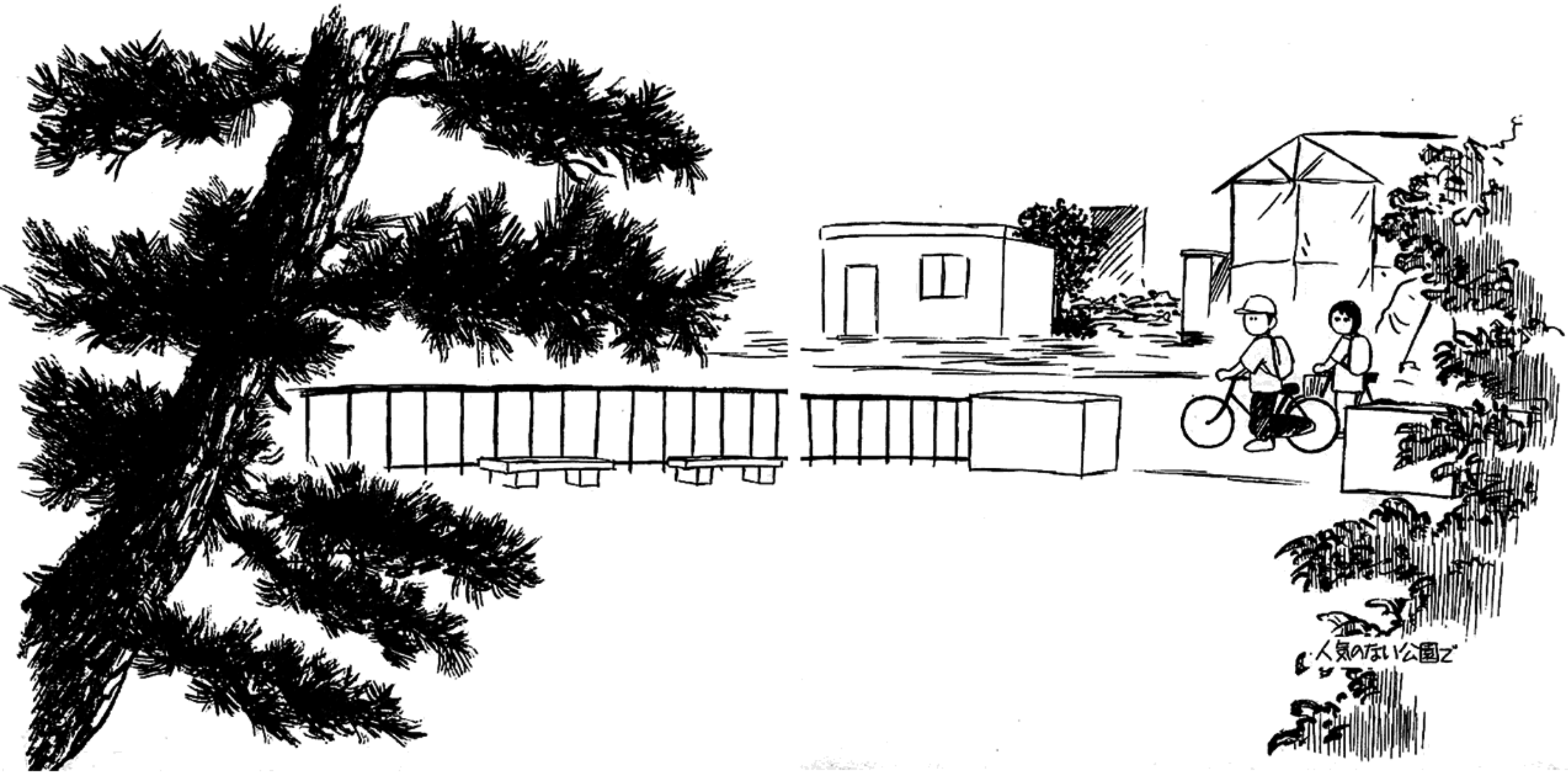
県の記録には  
一週間前に  
段ボール箱一個残して  
最後の一人も  
いなくなったとあった

二月初めにJICA  
訪ねた時は  
テントが軒をうつらね  
いつも火が焚かれ  
大勢が生活していた

あの人たちは皆どうしたろう  
親類の家や仮設住宅まで  
それぞれどんな暮らしを  
しているのだろうか

それを私が知る術はない

人気のない公園は  
曇り空の下  
ただ松の木だけが  
やけに林しぎろだった



人気のない公園



駒とめて  
袖うちほらふ  
かげもなし  
佐野の夜  
雪の夕暮

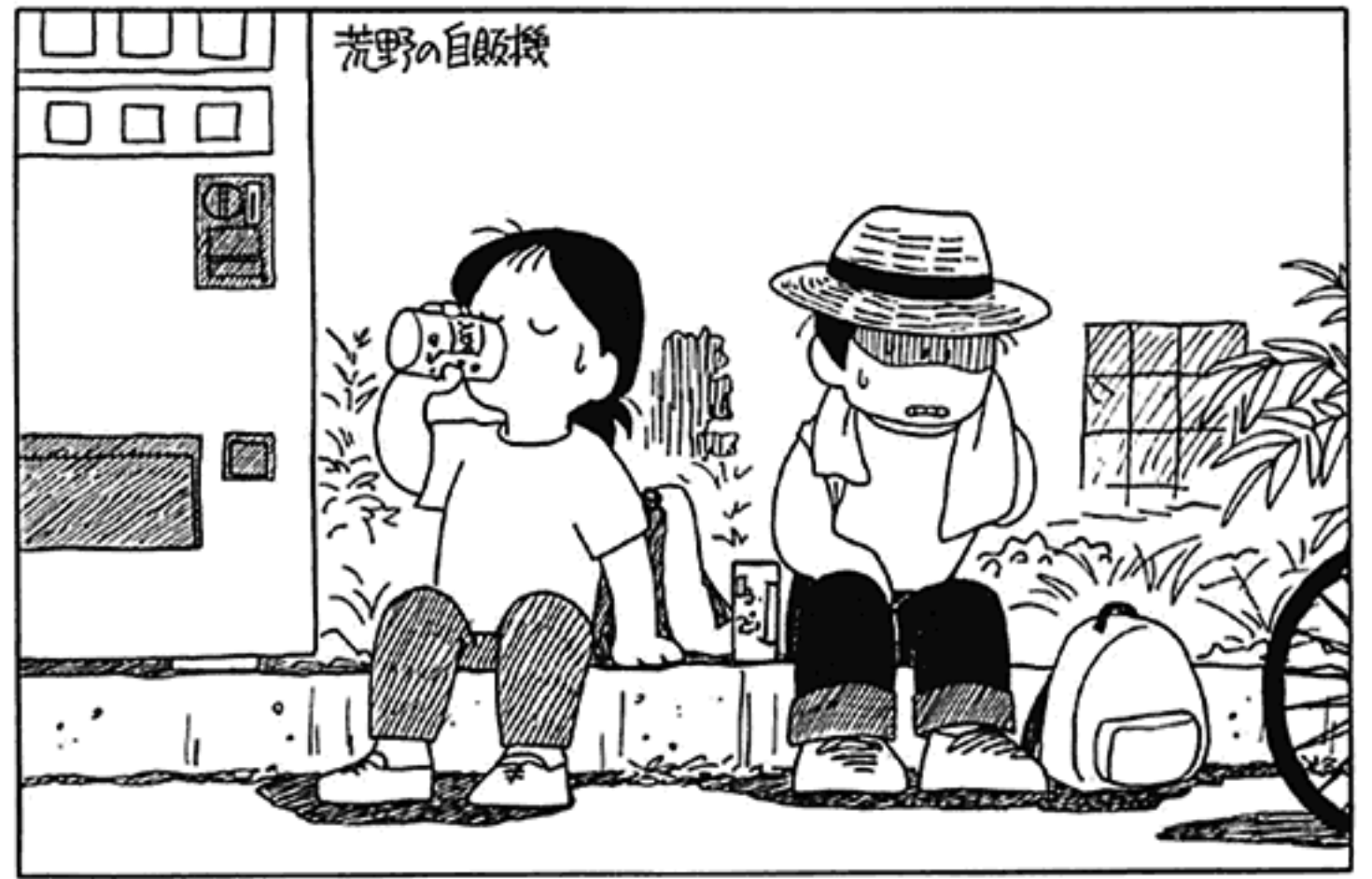
— 定家

チャリとめて  
汗を引かせる  
喫茶店もなし  
難の路上の  
夏の日中

— 愛子

# かいせつマシガ

テント村のこと



夏 編



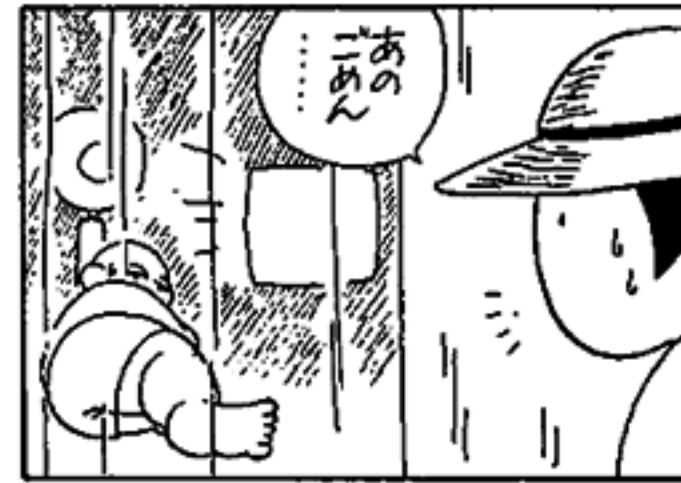
最終兵器



紫外線だけではない



暑い!! II



暑い!! I





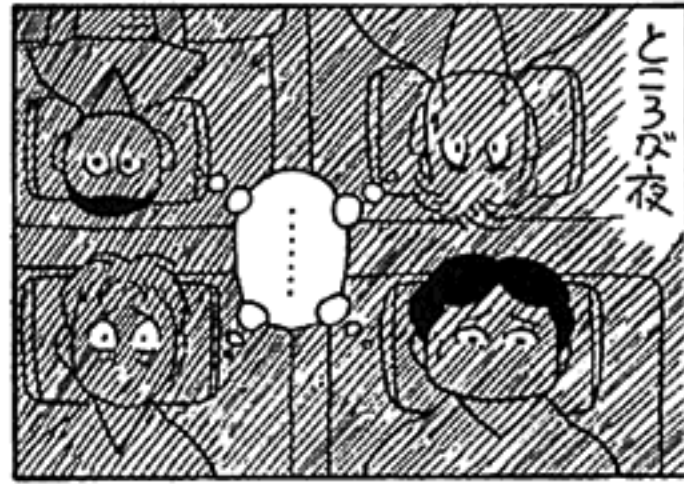
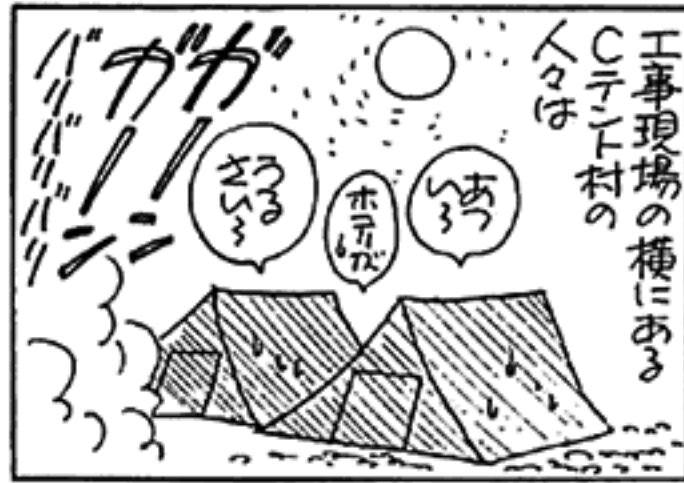




マンガより奇なり



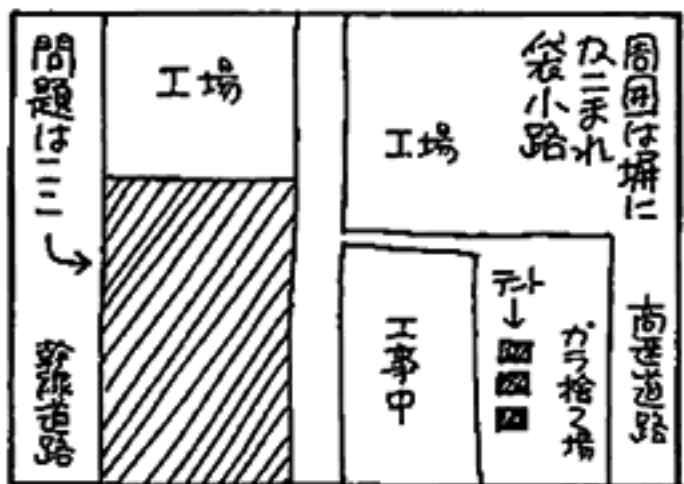
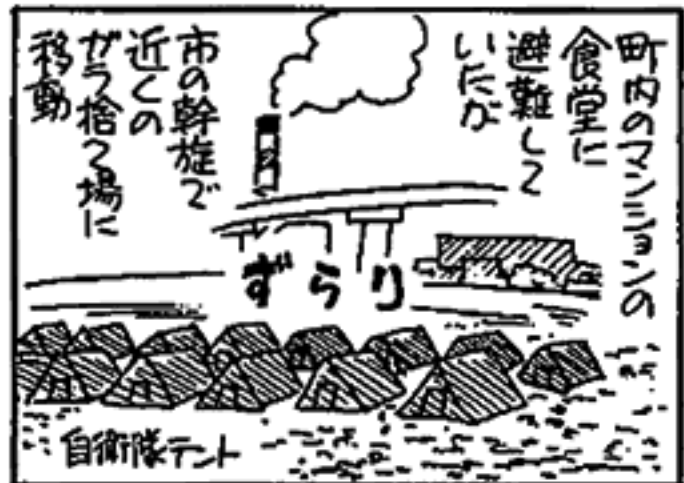
順応



再び関西おバについて



Cテント村の歴史



五度の抽選に  
外れ続けたGさん  
大阪の仮設のカギを  
受け取った

公園は蟬しぐれ

海も見えず

緑もない芝は

一日中飛行機が

頭の上を飛び交うという

「生まれながらの年

二二で暮らしたわ

よそへ移るやなんぞ

考えもせんかった」

公園は蟬しぐれ

「ひょっとしてもうー」

そまま言っこ

彼女は口をつぐむ

私もあとを訊かない

(帰っこれんかもしれん)

公園は蟬しぐれ

「体に気をつけこ」

とれだけ言っこれれた

陽はようやく西に

傾きはじめて

一度も蝸かいこの声を

聞かなかった

夏の終はつわり



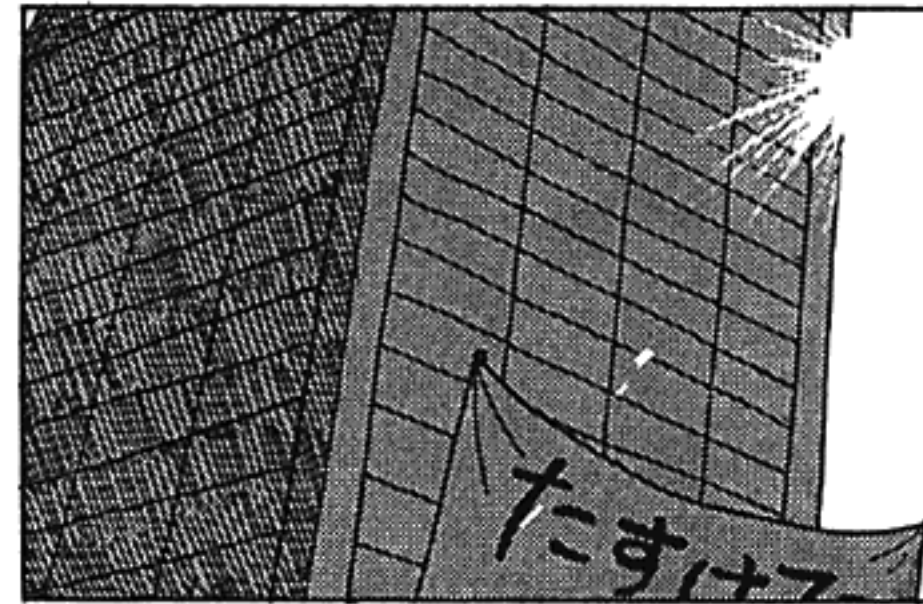








学校を  
追いつけられず  
行く所がないと  
泣きながら訴えていた  
名前も知らないオバチャン



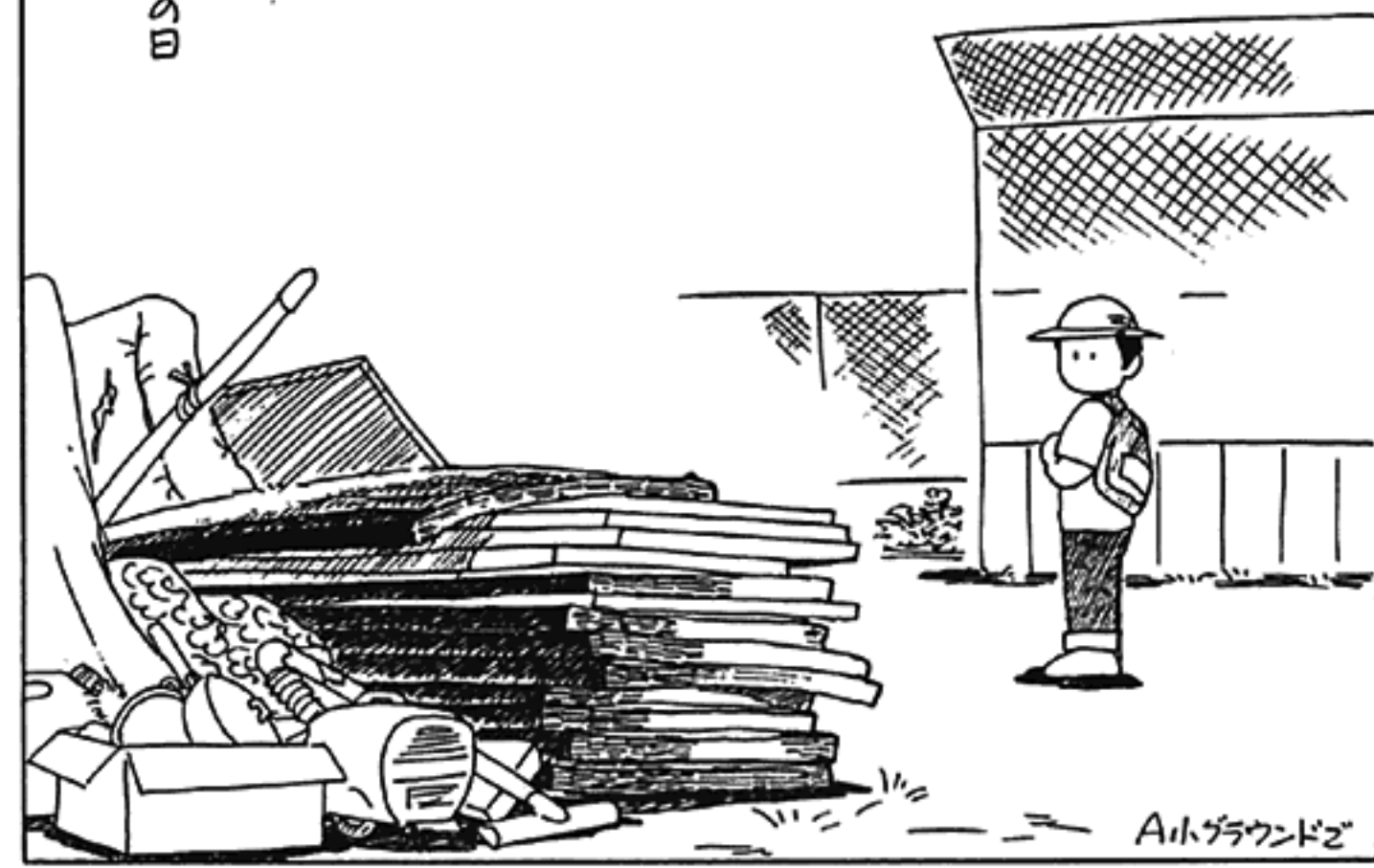
車からゴミや空き缶を  
投げられると  
路上小屋から1人で飯を  
移っていた  
四人家族の正さん

新築の店をなくし  
たご裁判になった  
公園の商店を  
続けるという  
焼き鳥屋のSさん

みほ一期一会の  
神戸の友人たち

一九九五年八月二〇日 難民の日

八月二〇日：災害救助法打ち切り・決断の人の生活維持を困難にする



AIGラウンド

'95.12.9

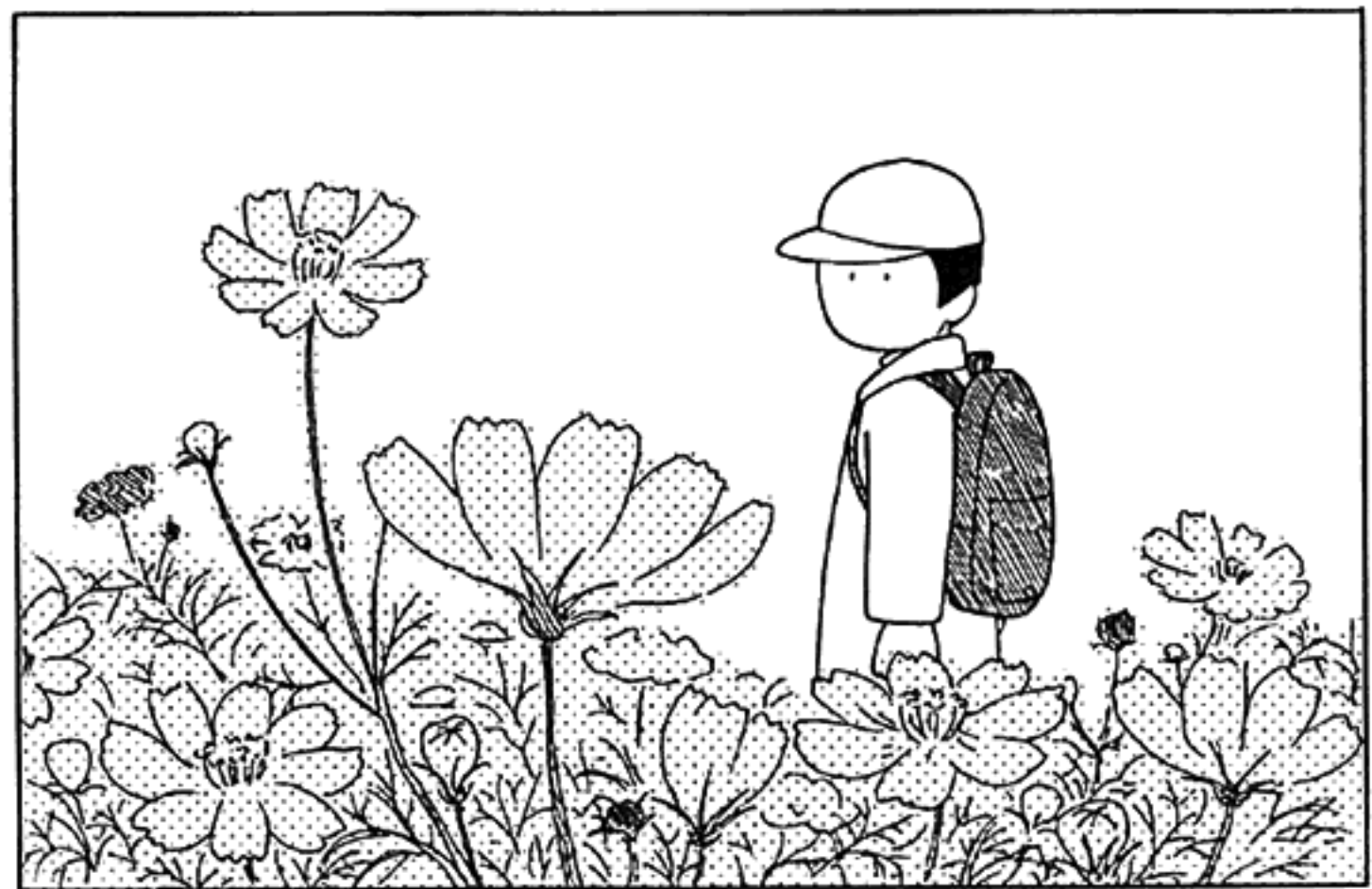
夏が終わり  
秋が来た

公園のゴミステーション  
駐車場のテントに  
畳の積み上げである  
体育館に

残った人々は  
早くも  
次に来る冬の  
仕度をしていく

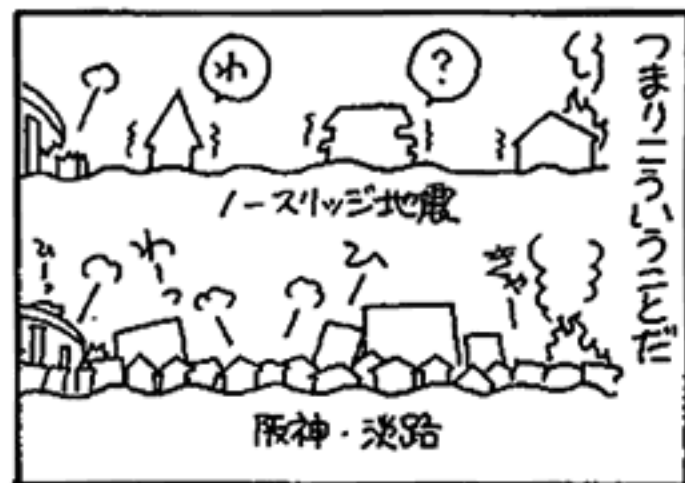
今年の木枯しは  
たぶんいつもより  
ずっと冷たい  
はずだから

家の建たない空地に  
誰かの植えたコスモスが  
無言で揺れている



秋 編

君 L'Aの旅



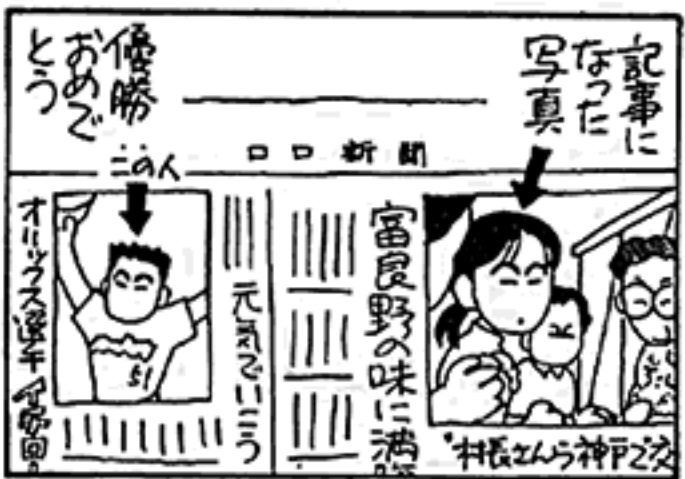
HIC(国際居住者連合)来神



教か国語と操3私



おの人に似た女



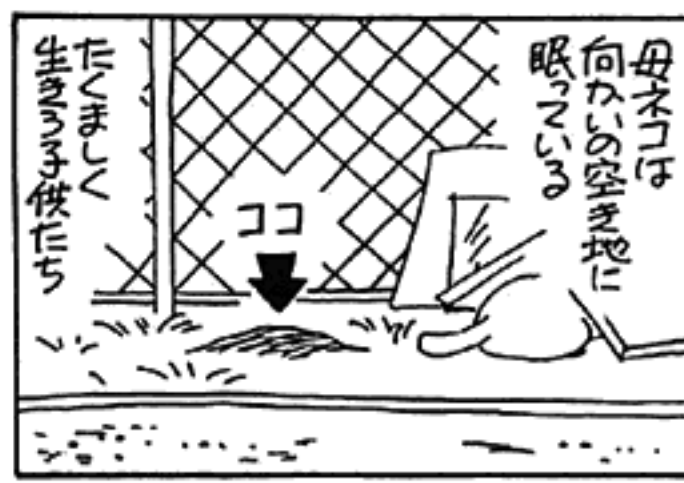
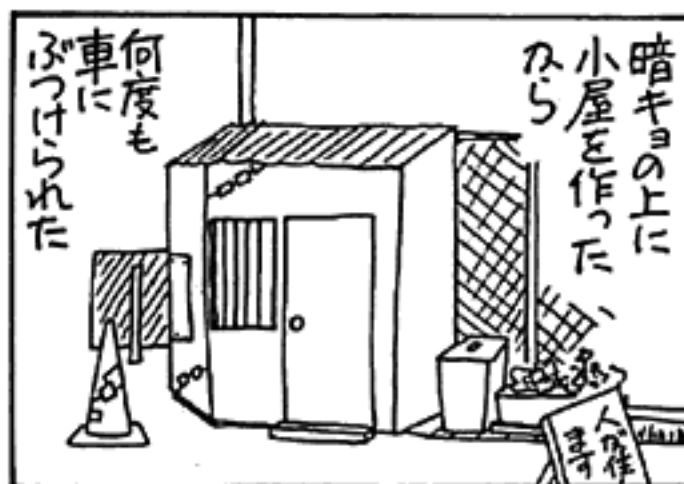
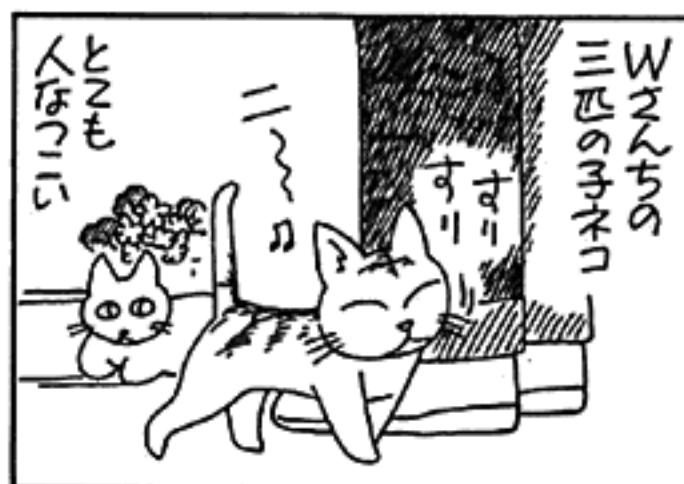
Habitat International Coalition. 住み手と住まわす人との交流



タイムスリップ



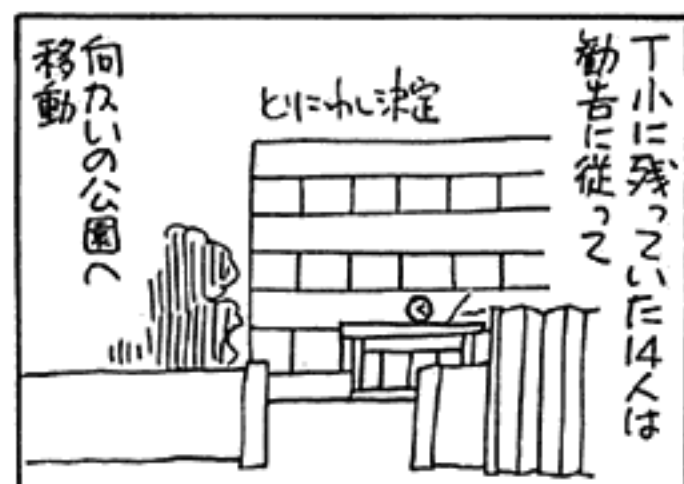
洪水のおとど



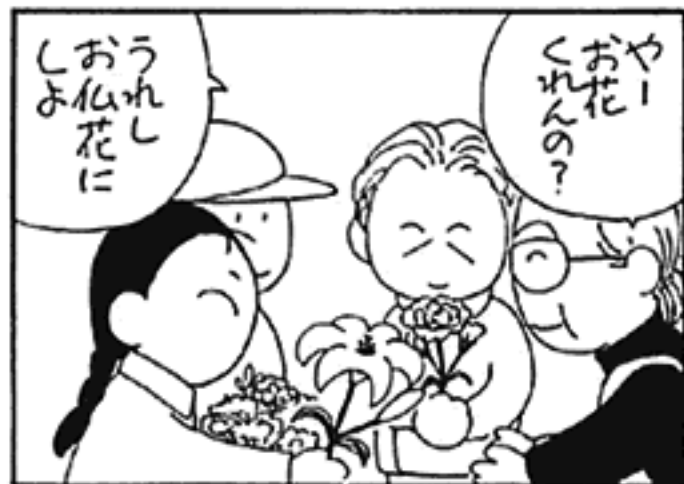
おそろバき情報



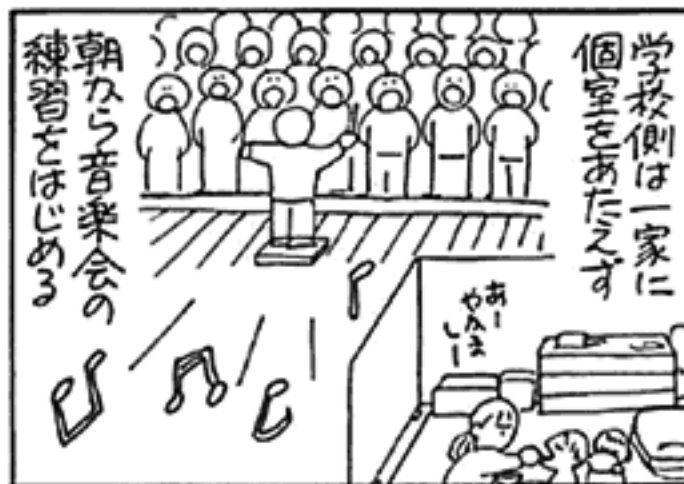
わか学舎(おびや)



ボランティアとは



最後の一家



情が仇



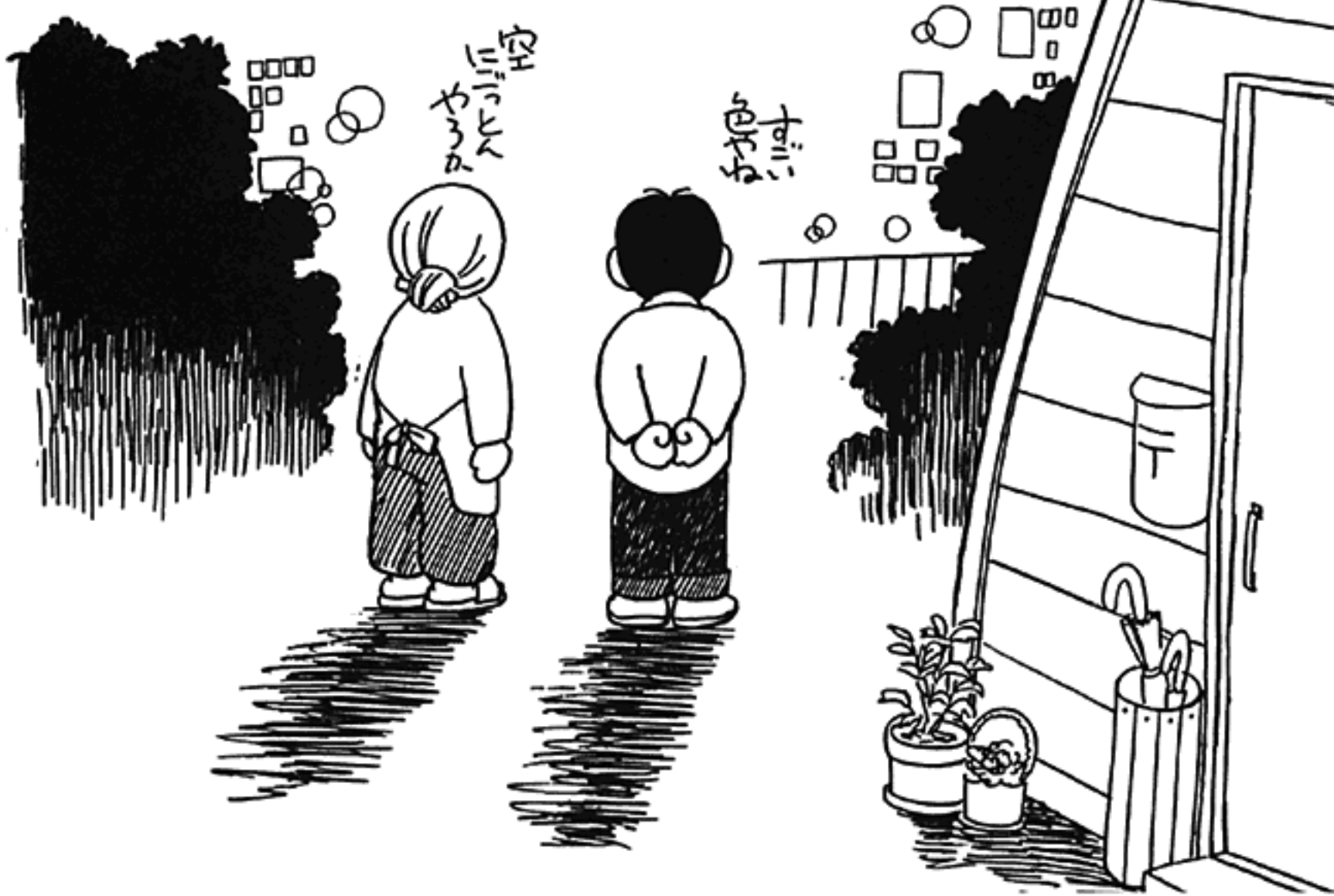
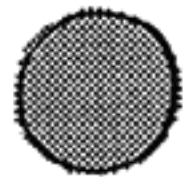
リサイクル





須磨にて

公園の十月月日や赤い月 愛子



むしろ逆に



お母さんのアルバム



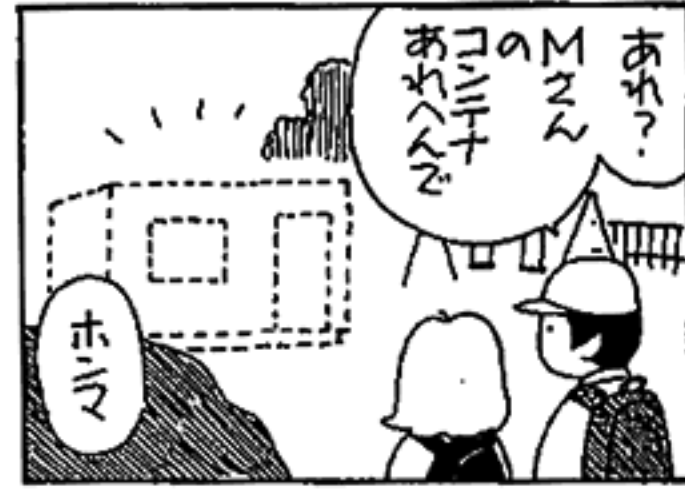
液状化関係



ミジフォスの苦難



裏あっせん



断腸の思い





鳥居が崩れたまま  
放置してある  
近くの神社



めっきり人の  
姿の減った境内の  
残されたミート  
落ち葉が  
降りつせ

じきに冬が来る



かえうたメドレー

六甲おろしに  
血相変えて  
ミートきかける  
自作小屋

公園居よいか  
住みよいか

家のない奴ア  
俺ん排へ来い  
俺もないけど  
心配するほ

テントの中も  
煮炊きほんま  
仮設に行っても  
仕事がないと

あれはつけこ  
あやひや義援金



27年  
編

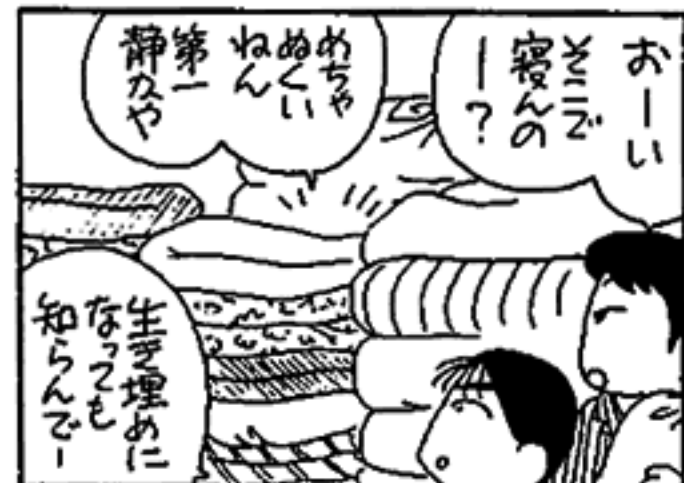
職人たち



さらに進化するテント



冬仕度



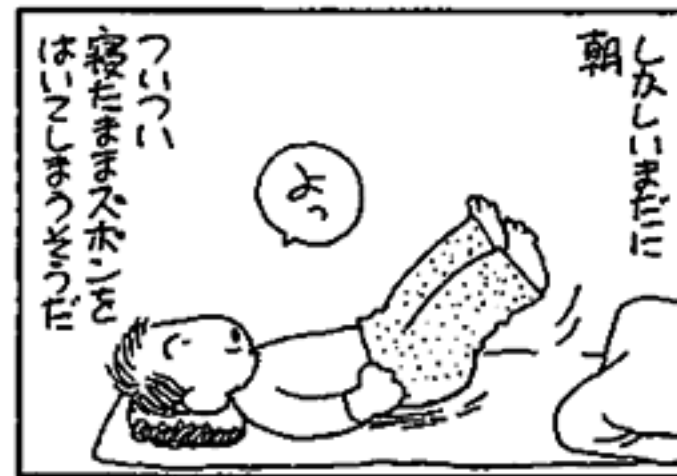
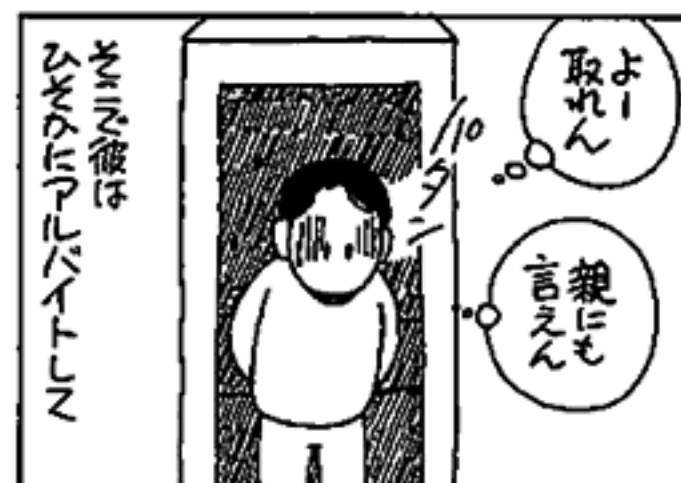
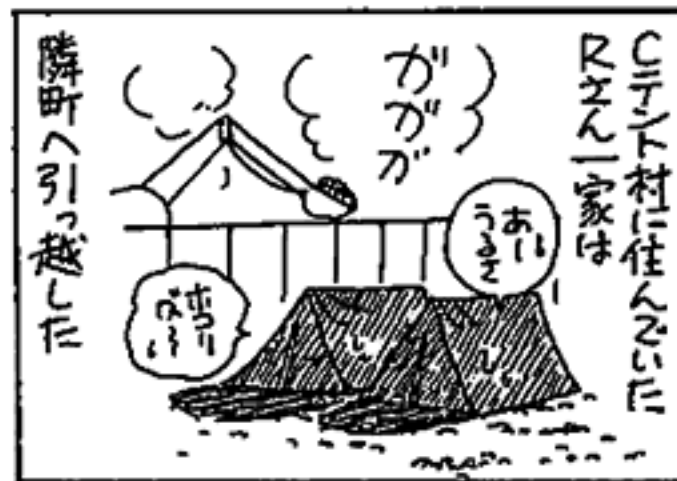


12.17 年越しまつり

しあわせのレベル

悲しき習性

なんなん泣き玉をす







一月十七日

天気曇り  
気温低め  
風やや強し

夕方に朝から  
報道のヘリが  
うさぎい

あちこちで  
捧げられる慰  
献花 記帳

慰

2000年  
1月17日  
1996年11



皇太子と首相が  
いつの間にか  
やって来て  
知らない内に帰った

今日一日は  
たぶん日本中が  
地震を思い出し  
そして忘れる

忘れたために一日騒ぐ

明日からもまた  
生活が行っている



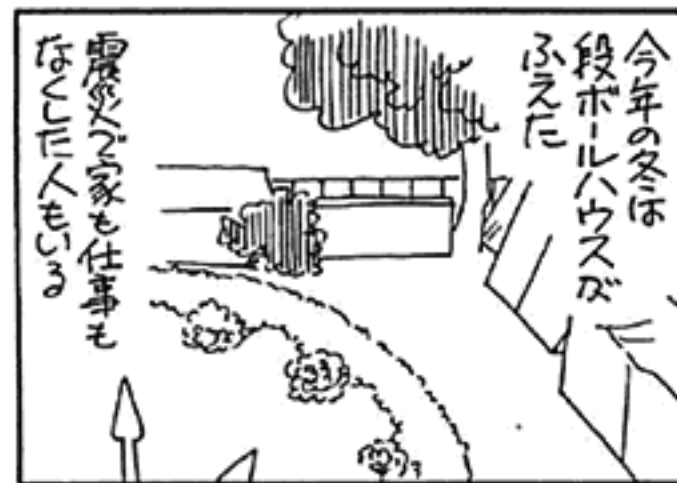
これは先輩!



みんなピンボが悪いんや



家は主人の冬

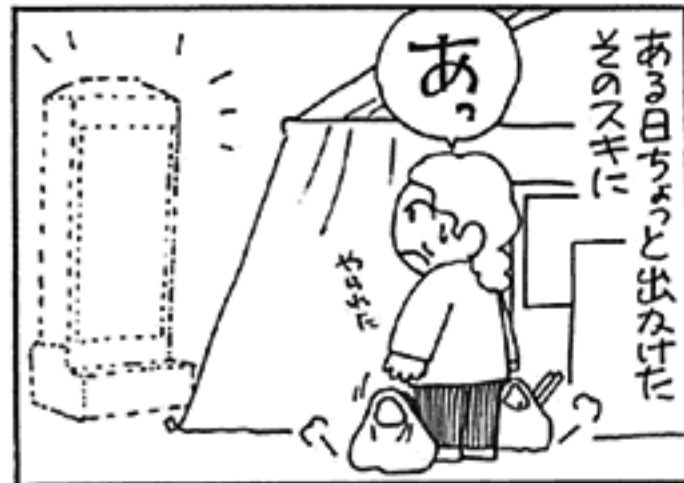


夜ま刈隊がゆく

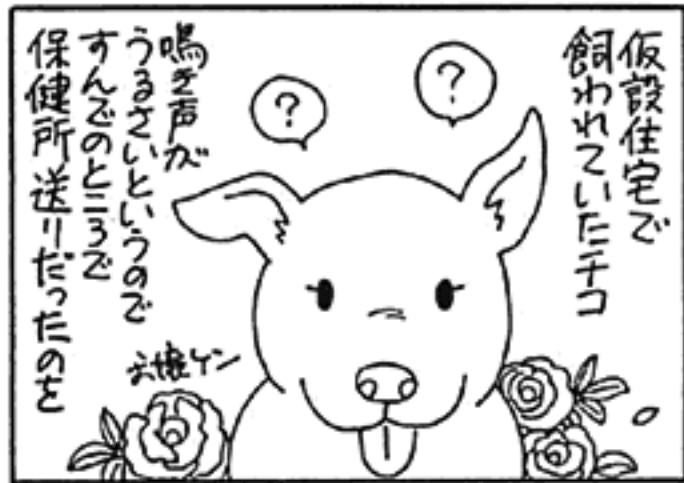




市はバラバラ中と聞いたが



千コの話



まったく関西人というのほ



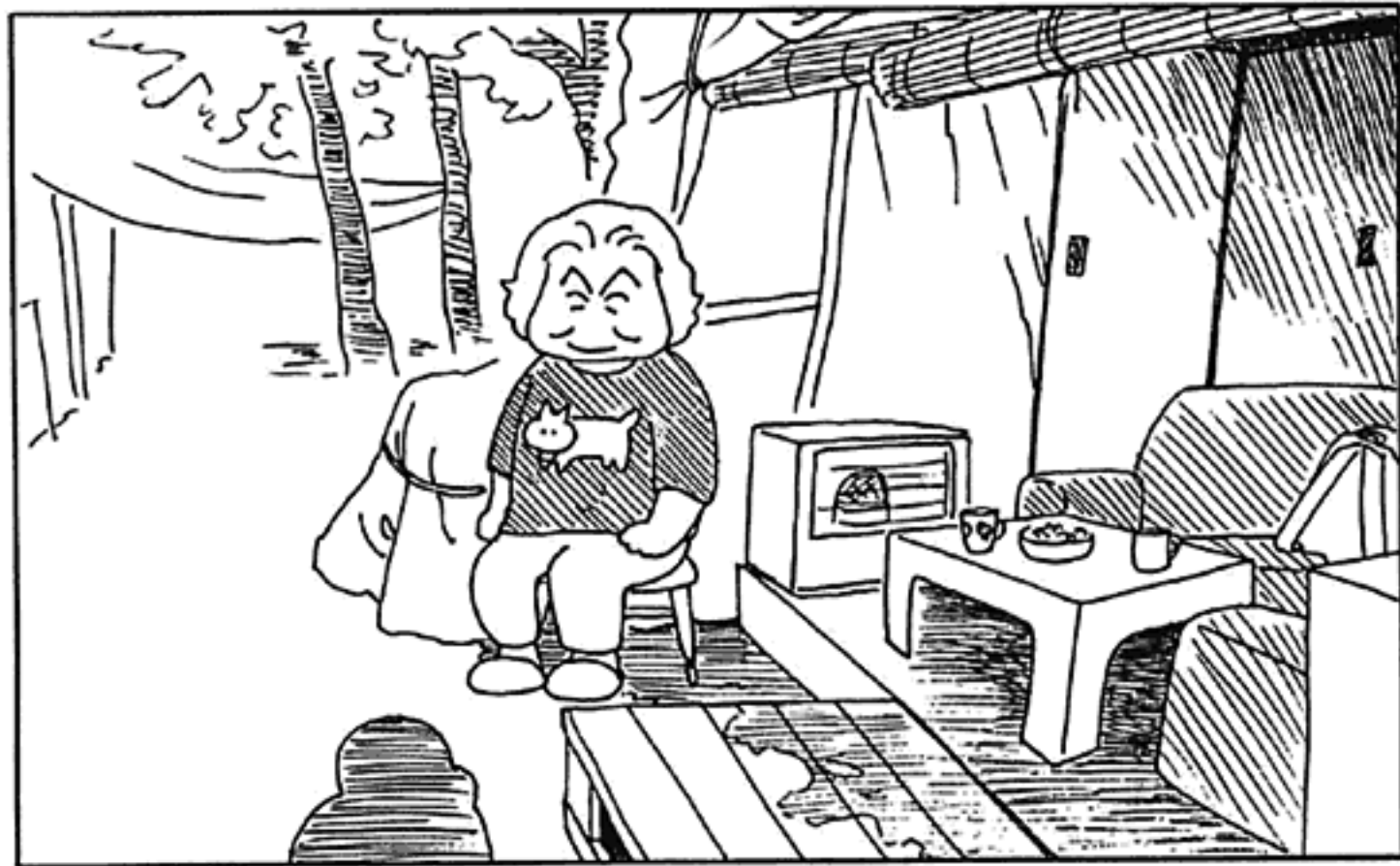
みんなピンボケ悪いや II



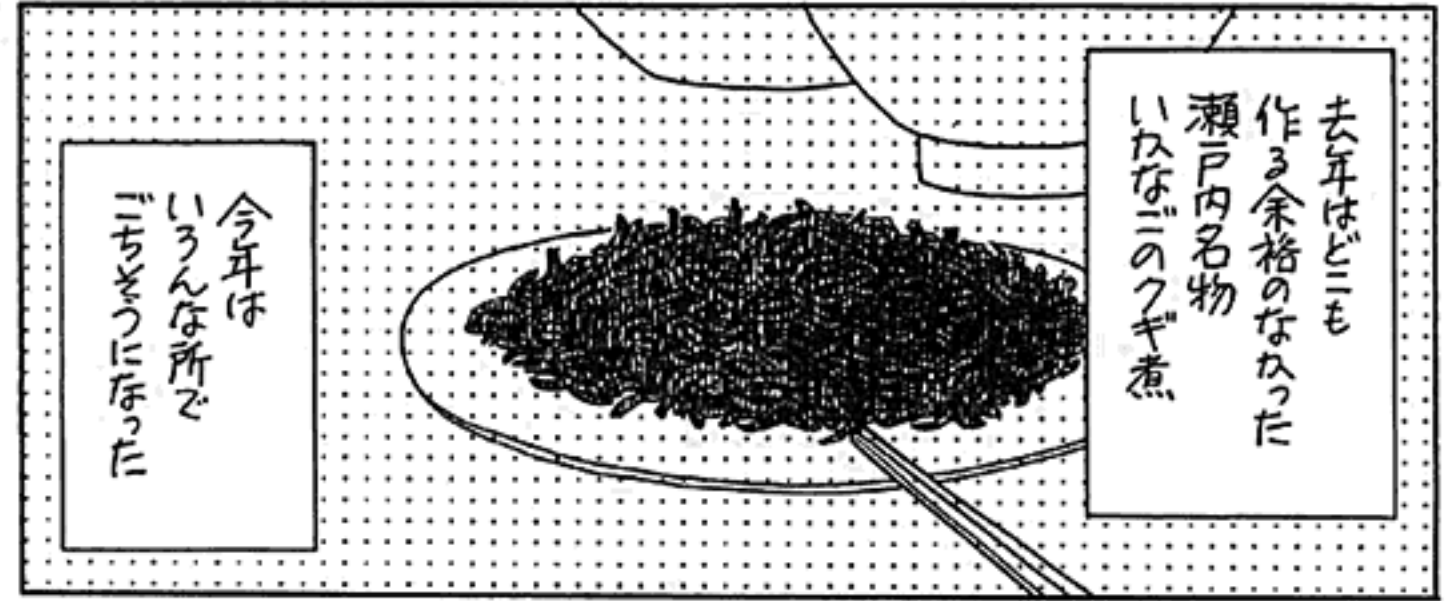
Ｔさんの日記より

# ある テント村の歴史

## とて今...

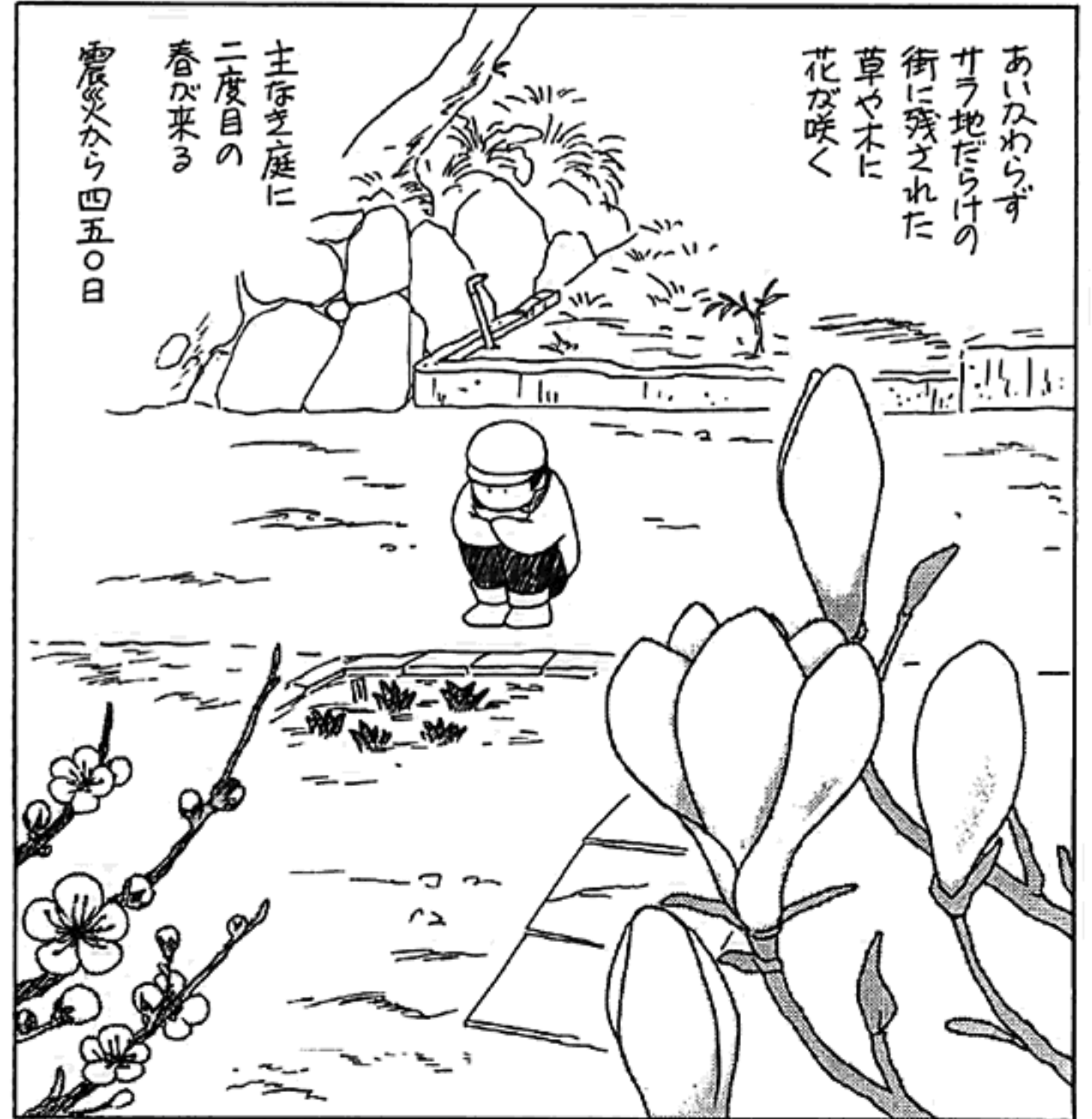


Ｔさん(50代)。震災前は飲み屋のママさん。店兼住居は全壊。  
 現在は神戸市内の公園のコンテナ小屋に住む。  
 同居人は病氣。収入遺族年金のみ。  
 再建の見通し立たず。公営住宅入居希望。  
 好きなコトバ：ボロは着ても心は錦。



今年はいろんな所で  
 ニチきつになった

去年はどいも  
 作る余裕のなかった  
 瀬戸内名物  
 いななニのフギ煮

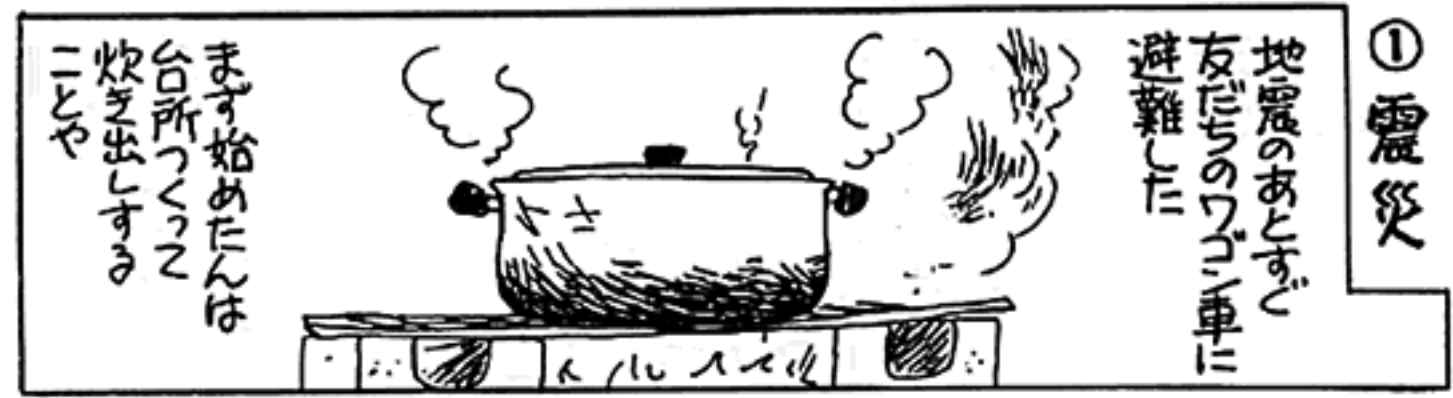


主なき庭に  
 二度目の  
 春が来る  
 震災から四五〇日

あいかわらず  
 サラ地だらけの  
 街に残された  
 草や木に  
 花が咲く



① 震災



地震のあとすぐ  
友だちのクルマに  
避難した

まず始めたのは  
火所つくって  
炊き出しする  
こと



店に残ったままの  
客の持ちより  
見舞金  
みんな使うて  
飲み食いした

明日どうなるか  
わからん命  
やなら  
今日食えらる  
モノ食えたら  
思ってたな



病人の世話  
せんならんわ

晩だけ  
寝ると二  
頭ん  
ますわ

どう  
ゆわんこも  
なあ



行くおれら  
学校はもう  
超満員

廊下まで  
人だら  
寝るとか  
おんたの  
入るん  
ほん



昼は自宅の倉庫で  
寝てるん人の看病

晩は体育館の  
すみこ  
寝てるん毎日



知りあいの  
おんた

寝るとか  
やたら  
ウチと  
おいで  
体育館  
やけど

うん

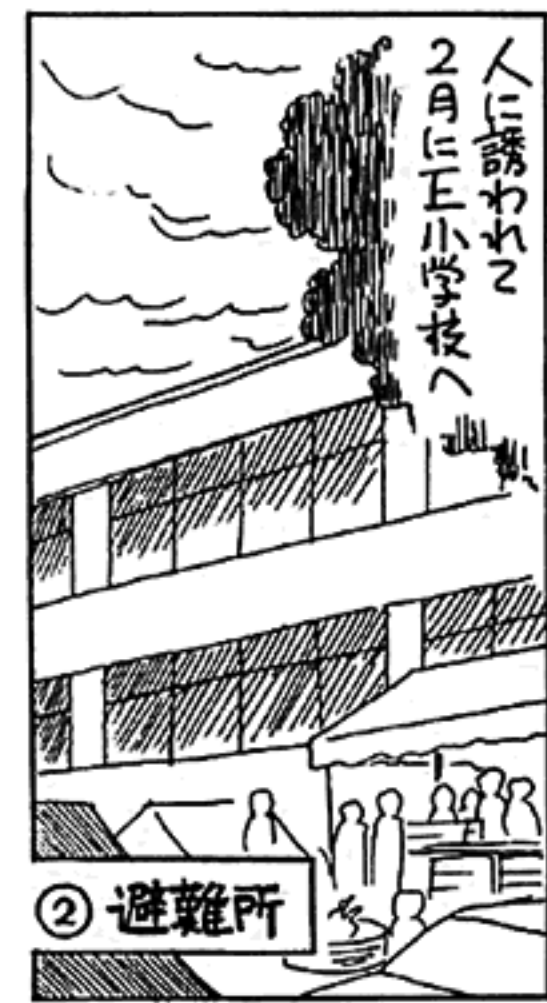


何しに  
何ともかんとも  
行列

罹災証明  
義援金  
弁当水  
フ口医者  
物資

せい  
ま  
せい  
ま  
せい  
ま  
せい  
ま

用事  
せい  
ま  
せい  
ま  
せい  
ま  
せい  
ま



② 避難所



カラオケの  
機械あつたら  
50円玉いっぱい  
出さな  
な

今思たら  
面白半分  
やたなもな

お金も何も  
のうな



けい店のオーナーの  
Iさんが  
倒れまして  
家がたぬ  
倉庫たぬ

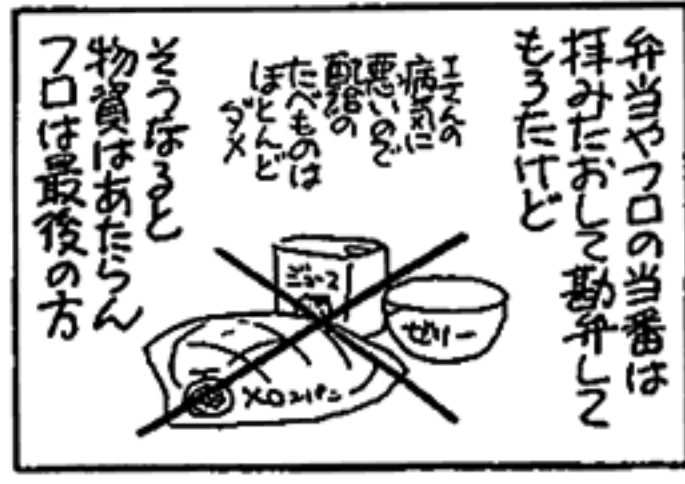
毎日看病も  
行かんらん

いつまでも  
友だちの車に  
一緒に  
おれんなら



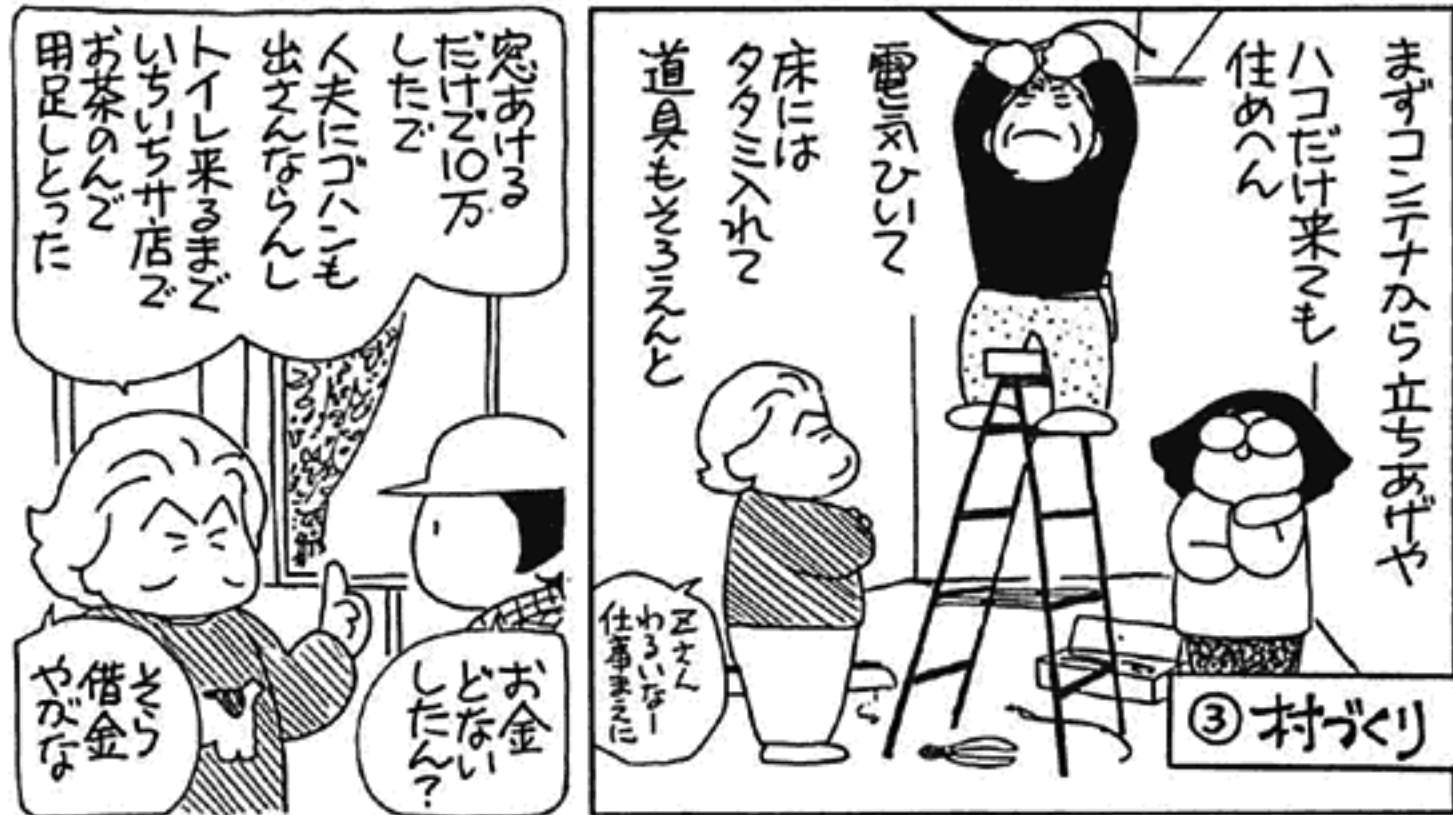
雪人中  
3時間  
立つて  
フ口  
入れん  
15分や

せい  
ま  
せい  
ま  
せい  
ま  
せい  
ま

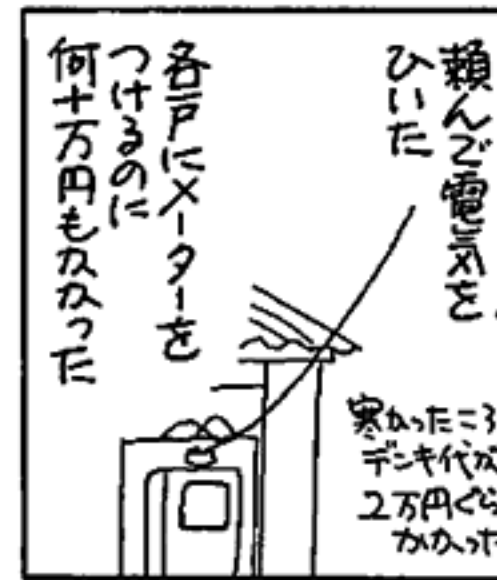
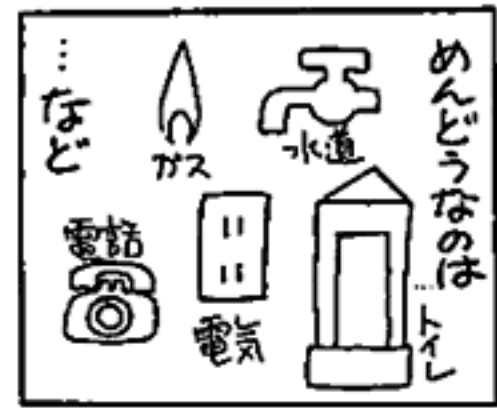


弁当フ口の並ば  
持たおし  
もったけど

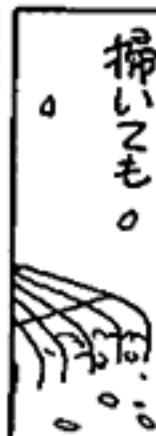
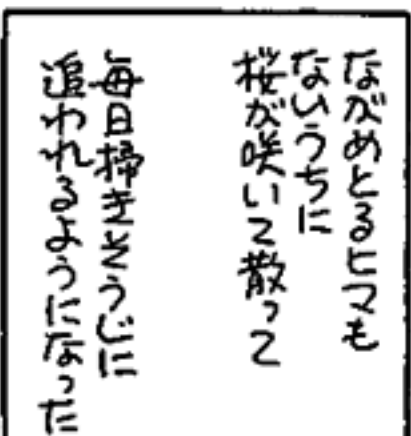
フ口は最後の  
物資







④ 村の生活



⑤ 梅雨~夏

雨の多い梅雨やった

屋根のブルーシートも何回も補強した

Iさんはついに入院して手術すまじとになった



最初に住んだ小屋の家族が出ていって

その空きにまた新しい人が入った

梅雨が明けると猛暑の夏



蚊ハエゴキブリ

地面からアリ木からはも虫

一番腹の立ったこと

水戸から来た工事関係の若い人ら



近くの路上に車を止め寝泊まりしてたのがゴハンを毎日作って一緒に食べた


水や電気も自由に使わせてった

あんなにアッパまたいもん

あんなにアッパまたいもん

あんなにアッパまたいもん

あの日突然何のアイサツもなく



消えとった

ゴハンも電気もクダら思とったんやろか

8月20日 災害救助法打ち切り

E小ならもたごさんが出ていったけど

これは全然関係なしや (さんさもトイレも持って行かれかけたけど)

台風だけはちゅんと来た仮設は結局誰も当たらんかった

台風~秋



夜の晩飯

水戸から来た

水戸から来た

国際NGOの調査団が来た



こないや

こないや

あんなにアッパまたいもん



あんなにアッパまたいもん

あんなにアッパまたいもん

秋が来た

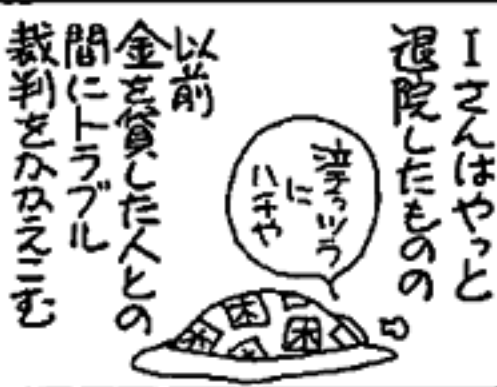
紅葉の山



さうじつはJNの問題を

もりん

Iさんはやっと復院した



以前金を貸した人との間にトラブル裁判をかかえ

あれでも初めこのギョをやって二箇所や親しい人に配ったりした



テントでもちゅんと生活しようとしてわんこもわんこ

\*HIC・国際ピット(居住者)連合



⑦ 2度目の冬

暮れも押しつまった  
ころ新しい住人が  
また一人ふえて  
みんなこ小屋を  
2日と建てた



公園をほめて  
迎える正月

しめ縄を飾って  
年始まわりをして  
皆で初もうたに行った



1月17日  
震災から一年

集会ご会った  
おはあちゃん  
あん時は  
生きてもよかった  
思たけど

今は死んどったら  
よなうた思て  
しまうねん



孤独死とか  
騒がれ出したん  
あのころ  
ちやうど  
はじめの内  
助け合うことも  
見栄が  
だんだん  
出でくねん  
世間体  
悪いとみ



2月一人が息子の  
家へ引越す  
昔の  
知りあいが入院  
世話を頼まふる



⑧ 初雪

格の枝に  
雪がつもり  
花が咲いたよう  
でも  
木なら落ちる  
雪の音は  
さびしい

去年あった  
いっくんのこと  
思い出さす  
初めて神戸以外の  
日本の出来事に  
思いをはせる



3月  
K家の  
3回忌  
法要を  
テント村で  
した

その月の末  
Kさん一家は  
市のあつせんぞ  
仮設に移って  
いった

⑨ 別れ

家族4人には  
せまいし  
環境も悪い  
子供らに肩身  
せまい思い  
させとないかなあ



子供らもがんばるんで  
姉は二のテント小屋で  
勉強して  
資格をとったし  
弟は  
バイトしながら  
夜間高校に  
通ったんや



遠くの仮設に  
当たったとて  
学校も仕事を  
続けられへん  
なったやう  
Kさんは今も  
毎日公園に来る

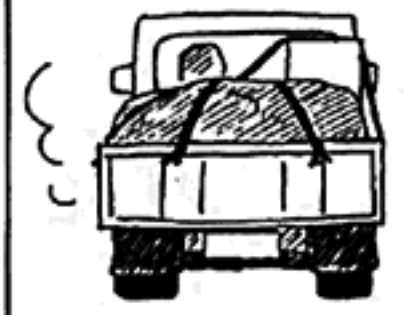


4月 大家の小屋を  
市が撤去に来た  
自分らの金で  
買ったんやなら  
工代も置いてほしい  
言っと



それなら自分らで  
解体しよと言われ  
大ゲンカ

震災から  
1年  
3ヶ月  
ひとり者のAさんと  
梅雨前に仮設に  
入りたいと言つて  
市のあっせんを  
拒んだ



6月 3日

やっと大家と  
折りあいついて  
店再建するの  
前の子の  
大ききおなら  
息子と一緒に  
住め入んねん  
けど



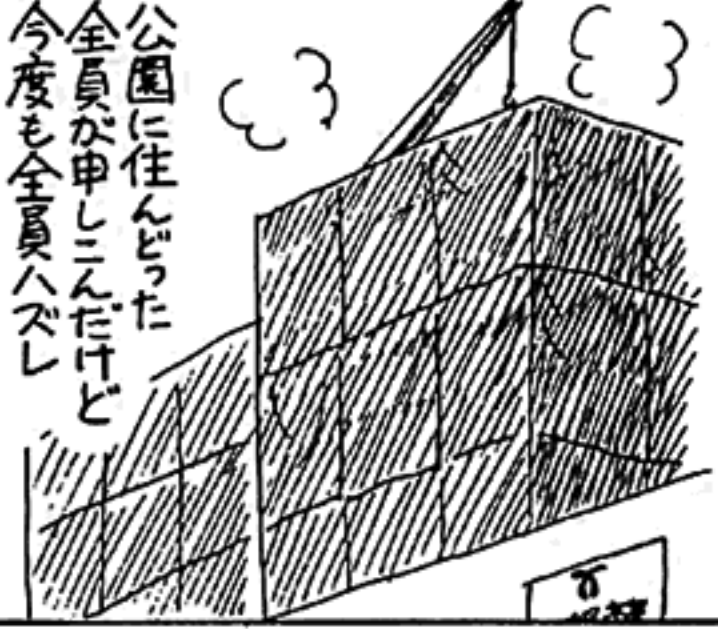
7月 1日

アイさんは  
このころまた入院  
秋まで毎日つきまとい



10月

災害復興住宅の抽選  
公園に住んどうた  
全員が申し込んだけど  
今度も全員ハズレ



11月  
いまだに  
土木課と区の職員が  
東になつて来た

⑩ 今と

電気がと  
ガスは？  
自分らで  
払とう  
水は？  
それは  
公園のや  
けど  
払えやうんなら  
払うぞ

ほな  
土地は？  
土地は  
あんたの  
ちやうど  
しよう



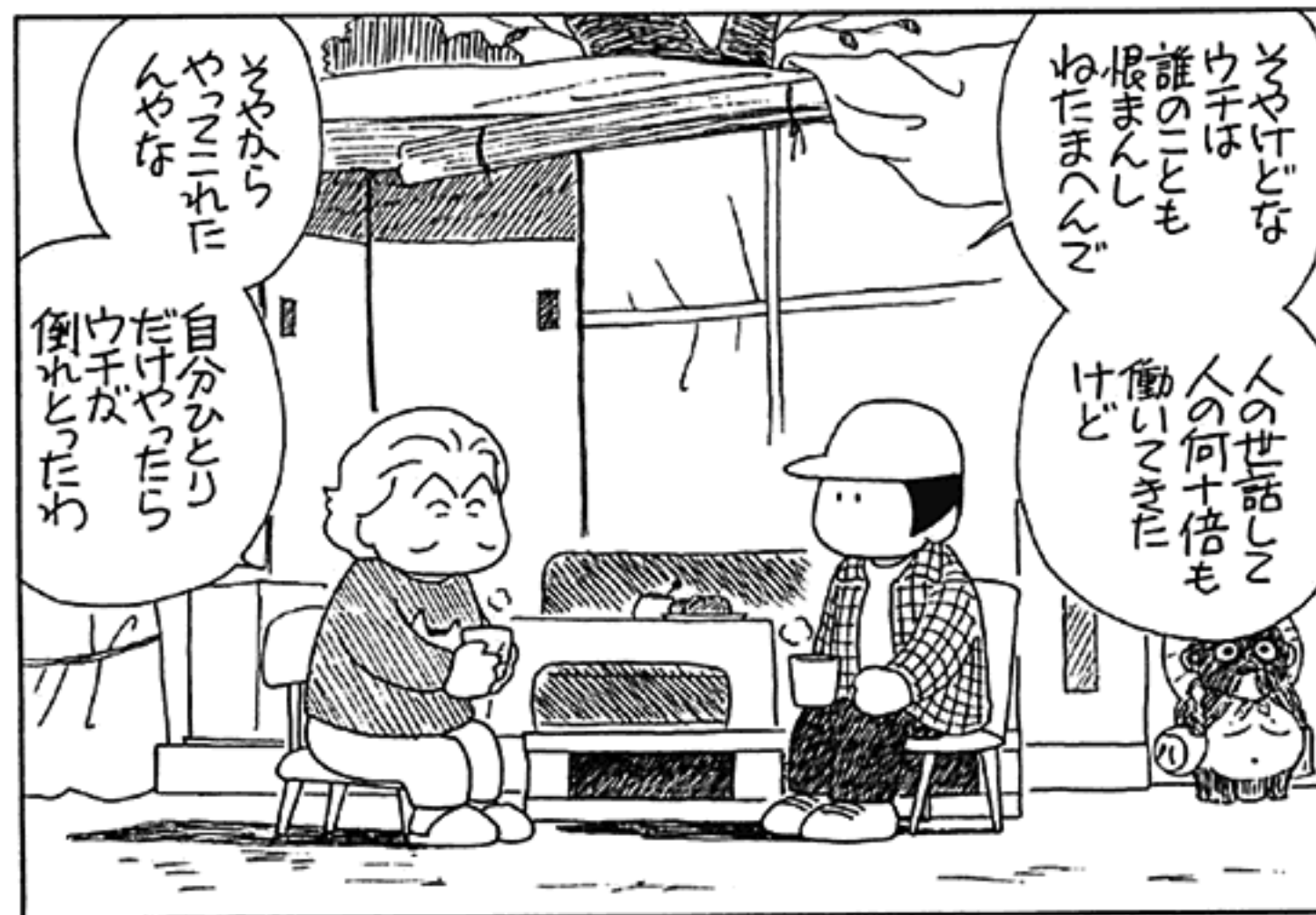
千エふるまえたね  
ウチらが必死で  
この場所を生活  
立直しよう時  
「避難所と  
ちがうから  
知らん」  
ゆうといこ

もう  
晩ごはんや  
か  
今日は  
帰って  
んか

まー  
さー言おんと  
D仮設  
部屋ようけ  
空いとん  
ますよ  
アイさんと  
一緒でも  
結構ですよ  
お家族やないけど  
トウハイに





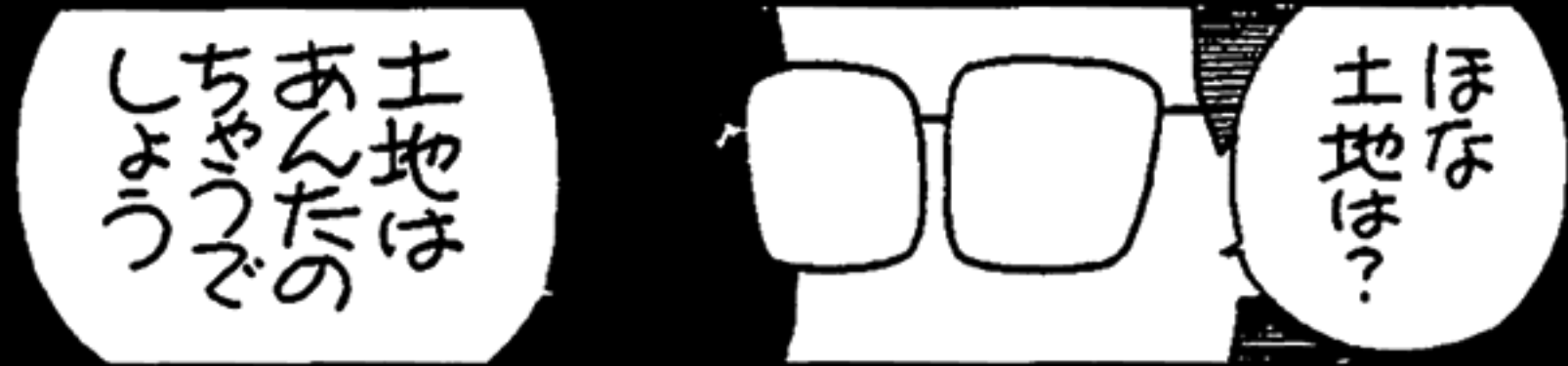




こんな  
大したこと  
ないわ

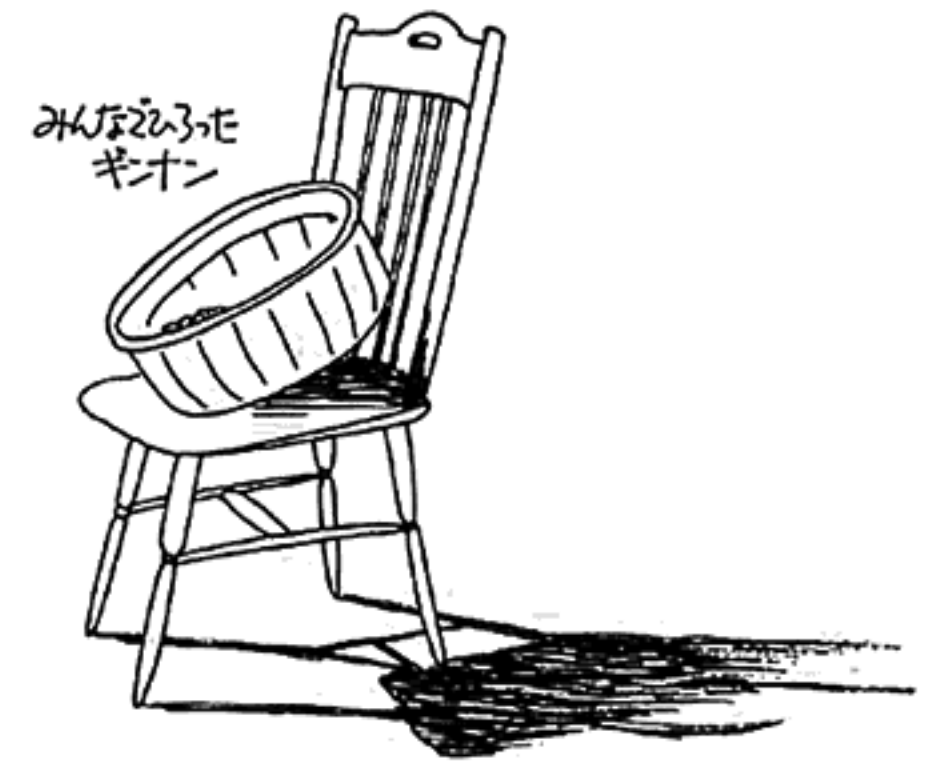
ま  
昔に苦勞に  
くすりす

...と言って笑うTさんは今も公園にいます。



土地は  
あんなの  
ちやうど  
しやうど

ほな  
土地は？



みんなに  
ギン

おわらない。

1996.12.9 震災から692日



「愛ちゃんの神戸巡回日記」(原題「愛ちゃんのボランティア神戸日記」)は最初、神戸YWCA救援センターにやって来るボランティアのオリエンテーション用に描いたものです。思わぬ好評をいただき、95年の9月には、いったん東京の出版社からブックレットの形で出版されました(「初夏編」まで)。今回はその続編をまとめたものです。

神戸に3度目の冬が来ました。私たち救援センターの活動は、当初から、行政に置いてきぼりにされた人々への支援だったので、テント村はもちろん、罹災証明さえもらえない日雇労働者の人達、そして、いずれは立ち退きを迫られる仮設住宅と活動範囲は広がるばかり、そして実働メンバーは減るばかりです。

それでも神戸に通い続けるのは、たぶん、私が、「震災にあった不幸な人達の身の回りの世話をしに来た親切的なヒト」ではなく、

「震災で否応なく“社会的弱者”にされてしまった人

達を、ひとことと思えず手弁当で応援に来た物好きなヒト」

だからなのだと思います。(「手弁当」いいでしょう。最近またそろそろサン臭い使われ方をしている「ボランティア」という言葉より、こっちの方が私は好きです。)

壊れた道路やビルは再建され、観光地や祭も再開されました。でも街にはサラ地が目立ちます。みんなの心の傷も癒えていません。なんとか自力再建した人も、元の暮らしに戻れない人も、今はそれぞれ自分を守る垣根を、必死で高くしているように感じます。そしてたぶん、それはこの国の姿そのものなのです。上から見るとピカピカだけど、下はグチャグチャ。でも、ピカピカの上空の景色より、グチャグチャの下界の住人達の方がラブリーで、そして時には感動的に思えてしまうもので、だから私はいまだに神戸に通い続けているのです。

どうもありがとうございました。

一九九六年十二月

たけしま さよ

マンガ 愛ちゃんの神戸巡回日記  
三度目の冬が来た

1997年3月3日 発行

著者 たけしま さよ◎  
発行者 市山隆次  
発行所 長征社  
神戸市中央区北長狭通5-8-6  
電話078(371)6491  
郵便振替/00930-9-15755  
印刷・製本 日本電植株式会社

●定価はカバーに表示してあります。  
※落丁・乱丁本は、お手数ですが、小社宛お送りください。  
送料小社負担でお取りかえいたします。

ISBN4-924929-18-2 C0036